

7 滑らかな関数による近似

定理 7.1

$1 \leq p < \infty$, I を開区間, $u \in W^{1,p}(I)$ とする. このとき $\{u_n\} \subset C_c^\infty(\mathbb{R})$ が存在して, $u_n|_I \rightarrow u$ in $W^{1,p}(I)$ が成り立つ.

- これを証明するために次の準備をする.

補題 7.2

$\rho \in C_c^\infty(\mathbb{R})$, $v \in W^{1,p}(\mathbb{R})$ に対して $\rho * v \in W^{1,p}(\mathbb{R}) \cap C^\infty(\mathbb{R})$ であり,

$$(\rho * v)' = \rho * v'$$

が成り立つ.

証明

- Young の不等式 (定理 3.1) より $\rho * v \in L^p(\mathbb{R})$ である.
- $\rho(x - \cdot) \in C_c^\infty(\mathbb{R})$ であることに注意すると, 命題 3.2 より $\rho * v \in C^\infty(\mathbb{R})$ で

$$\begin{aligned} (\rho * v)'(x) &= \int_{\mathbb{R}} \frac{d}{dx} \rho(x-y) v(y) dy \\ &= - \int_{\mathbb{R}} \frac{d}{dy} \rho(x-y) v(y) dy \\ &= \int_{\mathbb{R}} \rho(x-y) v'(y) dy = (\rho * v')(x) \end{aligned}$$

を得る.

- 再び Young の不等式から $\rho * v' \in L^p(\mathbb{R})$ であるので $\rho * v \in W^{1,p}(\mathbb{R})$ である.
□

補題 7.3

$\zeta \in C_c^\infty(\mathbb{R})$ を $0 \leq \zeta \leq 1$ なる関数で

$$\zeta(x) = \begin{cases} 1 & (|x| < 1) \\ 0 & (|x| \geq 2) \end{cases}$$

なる関数とする. $\zeta_n(x) = \zeta(x/n)$ ($n = 1, 2, \dots$) とおく. $1 \leq p < \infty$ に対して $f \in L^p(\mathbb{R})$ とすると $\zeta_n f \rightarrow f$ in $L^p(\mathbb{R})$ が成り立つ.

証明 練習問題とする.

定理 7.1 の証明

- 拡張定理により $u \in W^{1,p}(\mathbb{R})$ と仮定してよい.
- $\{\rho_n\}$ を正則化列, ζ, ζ_n を補題 7.3 のように定める. このとき $u_n = \zeta_n(\rho_n * u)$ とおくとき, $\{u_n\}$ が求めるものであることを示す. 補題 7.2 より $u_n \in C_c^\infty(\mathbb{R})$ であることに注意する.
- まず $\|u_n - u\|_{L^p(\mathbb{R})} \rightarrow 0$ を示す. 実際, 命題 3.4 と補題 7.3 より

$$\begin{aligned}\|u_n - u\|_{L^p(\mathbb{R})} &= \|\zeta_n(\rho_n * u) - \zeta_n u\|_{L^p(\mathbb{R})} + \|\zeta_n u - u\|_{L^p(\mathbb{R})} \\ &\leq \|\rho_n * u - u\|_{L^p(\mathbb{R})} + \|\zeta_n u - u\|_{L^p(\mathbb{R})} \rightarrow 0\end{aligned}$$

を得る.

- 次に $\|u'_n - u'\|_{L^p(\mathbb{R})} \rightarrow 0$ を示す. まず, 補題 7.2 より

$$u'_n = \zeta'_n(\rho_n * u) + \zeta_n(\rho_n * u')$$

である.

- 次に

$$|\zeta'_n(x)| = \frac{1}{n} \left| \zeta' \left(\frac{x}{n} \right) \right| \leq \frac{\|\zeta'\|_{L^\infty}}{n}$$

と Young の不等式により

$$\|\rho_n * u\|_{L^p(\mathbb{R})} \leq \|\rho_n\|_{L^1(\mathbb{R})} \|u\|_{L^p(\mathbb{R})} = \|u\|_{L^p(\mathbb{R})}$$

に注意すると, 命題 3.4 より

$$\begin{aligned}\|u'_n - u'\|_{L^p(\mathbb{R})} &\leq \|\zeta'_n(\rho_n * u)\|_{L^p(\mathbb{R})} + \|\zeta_n(\rho_n * u') - u'\|_{L^p(\mathbb{R})} \\ &\leq \|\zeta'_n(\rho_n * u)\|_{L^p(\mathbb{R})} + \|\zeta_n(\rho_n * u') - \zeta_n u'\|_{L^p(\mathbb{R})} + \|\zeta_n u' - u'\|_{L^p(\mathbb{R})} \\ &\leq \frac{\|\zeta'\|_{L^\infty(\mathbb{R})}}{n} \|u\|_{L^p(\mathbb{R})} + \|(\rho_n * u') - u'\|_{L^p(\mathbb{R})} + \|\zeta_n u' - u'\|_{L^p(\mathbb{R})} \\ &\rightarrow 0\end{aligned}$$

を得る. 以上で示された. \square

8 埋め込み定理と Sobolev 空間の元の緒性質

8.1 埋め込み定理

- この節では、Sobolev 空間に属する関数がいつ滑らかな関数と（a.e. の意味で等しく）なるかを与える Sobolev の埋め込み定理について述べる。

定理 8.1

$I \subset \mathbb{R}$ を開区間、 $1 \leq p \leq \infty$ とする。区間 I の Lebesgue 測度 $m(I)$ にのみ依存する定数 $C \geq 0$ が存在して

$$\|u\|_{L^\infty(I)} \leq C\|u\|_{W^{1,p}(I)} \quad (\forall u \in W^{1,p}(I))$$

が成り立つ。

注 上の命題は $u \in W^{1,p}(I)$ に対して $\tilde{u} \in L^\infty(I)$ がただ 1 つ存在して、 $u(x) = \tilde{u}(x)$ a.e. $x \in I$ なり、 $u \in W^{1,p}(I)$ に対して $\tilde{u} \in L^\infty(I)$ を対応させる作用素が有界線形作用素であることを意味する。このことを埋め込みあるいは単射 $W^{1,p}(I) \subset L^\infty(I)$ は連続であるという。

証明 $p = \infty$ のときは自明であるので $1 \leq p < \infty$ とする。

$I = \mathbb{R}$ の場合

- まず $v \in C_c^\infty(\mathbb{R})$ とする。 $1 \leq p < \infty$ に対して $G(s) = |s|^{p-1}s$ とすると $w = G(v) \in C_c^1(\mathbb{R})$ であり

$$w' = G'(v)v' = p|v|^{p-1}v'$$

が成り立つ。

- 微分積分学の基本定理から

$$w(x) = \int_{-\infty}^x w'(t)dt = \int_{-\infty}^x p|v(t)|^{p-1}v'(t)dt$$

であり、Hölder の不等式より

$$\begin{aligned} |v(x)|^p &\leq p \left(\int_{\mathbb{R}} |v(t)|^p dt \right)^{\frac{p-1}{p}} \left(\int_{\mathbb{R}} |v'(t)|^p dt \right)^{\frac{1}{p}} \\ &= p\|v\|_{L^p(\mathbb{R})}^{p-1}\|v'\|_{L^p(\mathbb{R})} \end{aligned}$$

のことと $\|v\|_{L^p(\mathbb{R})} \leq \|v\|_{W^{1,p}(I)}$ かつ $\|v'\|_{L^p(\mathbb{R})} \leq \|v\|_{W^{1,p}(I)}$ から $|v(x)|^p \leq p\|v\|_{W^{1,p}(I)}^p$ が成り立つ。 $p^{1/p} \leq e^{1/e}$ に注意すると

$$\|v\|_{L^\infty(\mathbb{R})} \leq C\|v\|_{W^{1,p}(I)} \quad (\forall v \in C_c^\infty(\mathbb{R})) \tag{8.1}$$

が成り立つ。

- 次に $u \in W^{1,p}(\mathbb{R})$ とすると、定理 7.1 より $\{u_n\} \subset C_c^\infty(\mathbb{R})$ があつて $\lim_{n \rightarrow \infty} \|u_n - u\|_{W^{1,p}(\mathbb{R})} \rightarrow 0$ が成り立つ。よって、(8.1) により $\{u_n\}$ は $L^\infty(\mathbb{R})$ の Cauchy 列である。 $L^\infty(\mathbb{R})$ は完備であるので、 $\tilde{u} \in L^\infty(\mathbb{R})$ があつて $\|u_n - \tilde{u}\|_{L^\infty(\mathbb{R})} \rightarrow 0$ が成り立つ。このとき $u(x) = \tilde{u}(x)$ a.e. $x \in \mathbb{R}$ もわかる。

実際、任意の $\varphi \in C_c^\infty(\mathbb{R})$ に対して

$$\begin{aligned} \left| \int_{\mathbb{R}} (u - \tilde{u}) \varphi dx \right| &\leq \left| \int_{\mathbb{R}} |u - u_n| |\varphi| dx + \int_{\mathbb{R}} |u_n - \tilde{u}| |\varphi| dx \right| \\ &\leq \|u - u_n\|_{L^p(\mathbb{R})} \|\varphi\|_{L^{p'}(\mathbb{R})} + \|u_n - \tilde{u}\|_{L^\infty(\mathbb{R})} \|\varphi\|_{L^1(\mathbb{R})} \rightarrow 0 \end{aligned}$$

であるからである。よって (8.1) はすべての $u \in W^{1,p}(\mathbb{R})$ に対して成り立つ。

$I \subset \mathbb{R}$ の場合

- 定理 6.1 (拡張定理) より、有界線形作用素 $P : W^{1,p}(I) \rightarrow W^{1,p}(\mathbb{R})$ とある定数 $C_1 > 0$ があつて (C_1 は p に依存しない)

$$\|Pu\|_{W^{1,p}(\mathbb{R})} \leq C_1 \|u\|_{W^{1,p}(I)} \quad (\forall u \in W^{1,p}(I))$$

が成り立つ。

- $I = \mathbb{R}$ の場合より、ある定数 $C > 0$ が存在して

$$\|v\|_{L^\infty(\mathbb{R})} \leq C \|v\|_{W^{1,p}(\mathbb{R})} \quad (\forall v \in W^{1,p}(\mathbb{R}))$$

が成り立つ。

- したがつて任意の $u \in W^{1,p}(I)$ に対して

$$\|u\|_{L^\infty(I)} \leq \|Pu\|_{L^\infty(\mathbb{R})} \leq C \|Pu\|_{W^{1,p}(\mathbb{R})} \leq CC_1 \|u\|_{W^{1,p}(I)}$$

を得る。□

定理 8.2

$I \subset \mathbb{R}$ 有界開区間とする。

- (i) $1 < p \leq \infty$ のとき埋め込み $W^{1,p}(I) \subset C(\bar{I})$ はコンパクトである、つまり、 $W^{1,p}(I)$ の有界列は $C(\bar{I})$ で収束する部分列をもつ。
- (ii) $1 \leq q < \infty$ に対して埋め込み $W^{1,1}(I) \subset L^q(I)$ はコンパクトである、つまり、 $W^{1,1}(I)$ の有界列は $L^q(I)$ で収束する部分列をもつ。

証明 (i) のみ証明をし、(ii) は補足で述べる。

- 定理 5.2 より、 $u \in W^{1,p}(\mathbb{R})$ と $x, y \in \bar{I}$ に対して

$$\begin{aligned} |u(x) - u(y)| &= \left| \int_y^x u'(t) dt \right| \leq \|u'\|_{L^p(I)} \left(\int_y^x dt \right)^{1/p'} \\ &\leq \|u\|_{W^{1,p}(I)} |x - y|^{1 - \frac{1}{p}} \end{aligned} \tag{8.2}$$

である。

- 次に $\{u_n\} \subset W^{1,p}(I)$ を有界列とすると、ある $M > 0$ があって $\|u_n\|_{W^{1,p}(I)} \leq M$ ($n = 1, 2, \dots$) が成り立つ。
- 定理 5.2 より $\{u_n\} \subset C(\bar{I})$ である。また、定理 8.1 より

$$\|u_n|_{C(\bar{I})} = \|u_n\|_{L^\infty(I)} \leq C\|u_n\|_{W^{1,p}(I)} \leq CM$$

を得る。したがって $\{u_n\} \subset C(\bar{I})$ は一様有界である。

- 次に (8.2) に対して、 $x, y \in \bar{I}$ に対して

$$|u_n(x) - u_n(y)| \leq \|u_n\|_{W^{1,p}(I)} |x - y|^{1-\frac{1}{p}} \leq M|x - y|^{1-\frac{1}{p}}$$

を得る。これは $\{u_n\} \subset C(\bar{I})$ が同程度一様連続であることを示している。

- Ascoli-Arzelá の定理より $\{u_n\}$ は $C(\bar{I})$ で収束する部分列をもつ。□

8.2 Sobolev 空間の元の性質

系 8.3

$1 \leq p < \infty$, $I \subset \mathbb{R}$ は非有界開区間とする。 $u \in W^{1,p}(I)$ ならば

$$\lim_{x \in I, |x| \rightarrow \infty} u(x) = 0$$

が成り立つ。

証明

- $u \in W^{1,p}(I)$ とする。定理 7.1 より、 $\{u_n\} \subset C_c^\infty(\mathbb{R})$ があつて $\|u_n|_I - u\|_{W^{1,p}(I)} \rightarrow 0$ が成り立つ。
- 定理 8.1 より $\|u_n - u\|_{L^\infty(I)} \rightarrow 0$ が成り立つ。
- 任意の $\varepsilon > 0$ をとると、ある $n_0 \in \mathbb{N}$ があつて $\|u_{n_0} - u\|_{L^\infty(I)} < \varepsilon$ が成り立つ。
- $u_{n_0} \in C_c^\infty(\mathbb{R})$ より、ある $M > 0$ があつて $|x| > M$ ならば $u_{n_0}(x) = 0$ ($|x| > M$) が成り立つ。
- したがって $x \in I$, $|x| > M$ ならば $|u(x)| \leq |u(x) - u_{n_0}(x)| + |u_{n_0}(x)| < \varepsilon$ が成り立つ。□

命題 8.4(積の微分)

$I \subset \mathbb{R}$ を開区間, $1 \leq p \leq \infty$ とする. $u, v \in W^{1,p}(I)$ に対して $uv \in W^{1,p}(I)$ で

$$(uv)' = u'v + uv'$$

が成り立つ. さらに, 次の部分積分の公式が成り立つ:

$$\int_y^x u'v dt = u(x)v(x) - u(y)v(y) - \int_y^x uv' dt$$

証明

- 定理 8.1 より $u, v \in L^\infty(I)$ であるから $uv \in L^p(I)$ であることに注意. 実際

$$\int_I |uv|^p dx \leq \|u\|_{L^\infty(I)}^p \int_I |v|^p dx < \infty$$

である. 同様に $u'v, uv' \in L^p(I)$ である.

$1 \leq p < \infty$ の場合

- 定理 7.1 より $\{v_n\} \subset C_c^\infty(\mathbb{R})$ があって $\|v_n|_I - v\|_{W^{1,p}(I)} \rightarrow 0$ が成り立つ. このとき

$$\|uv_n - uv\|_{L^p(I)} = \|u(v_n - v)\|_{L^p(I)} \leq \|u\|_{L^\infty(I)} \|v_n - v\|_{L^p(I)} \rightarrow 0 \quad (8.3)$$

を得る. つまり $\|uv_n - uv\|_{L^p(I)} \rightarrow 0$ が成り立つ. 同様に $\|uv'_n - uv'\|_{L^p(I)} \rightarrow 0$ が成り立つ.

- 次に定理 8.1 より $\|v_n - v\|_{L^\infty(I)} \rightarrow 0$ が成り立つので

$$\|u'v_n - u'v\|_{L^p(I)} = \|u'(v_n - v)\|_{L^p(I)} \leq \|u'\|_{L^p(I)} \|v_n - v\|_{L^\infty(I)} \rightarrow 0 \quad (8.4)$$

を得る.

- よって任意の $\varphi \in C_c^\infty(I)$ に対して

$$\int_I uv_n \varphi' dx \rightarrow \int_I uv \varphi' dx \quad (8.5)$$

が成り立つ.

- また v_n, φ は滑らかな関数なので $v_n \varphi' = (v \varphi)' - v'_n \varphi$ より

$$\begin{aligned} & \int_I uv_n \varphi' dx \\ &= \int_I u \{(v_n \varphi)' - v'_n \varphi\} dx \\ &= \int_I u(v_n \varphi)' dx - \int_I uv'_n \varphi dx \\ &= - \int_I u'v_n \varphi dx - \int_I uv'_n \varphi dx \quad (\text{弱微分の定義}, v_n \varphi \in C_c^\infty(I)) \\ &\rightarrow - \int_I u'v \varphi dx - \int_I uv' \varphi dx \quad (\because (8.3), (8.4)) \end{aligned} \quad (8.6)$$

- (8.5), (8.6) より

$$\int_I uv\varphi' dx = - \int_I (u'v + uv')\varphi dx$$

である。したがって $uv \in W^{1,p}(I)$ で $(uv)' = u'v + uv'$ が得られる。

$p = \infty$ の場合

- $u, v \in W^{1,\infty}(I)$ とすると $uv \in L^\infty(I)$ かつ $u'v + uv' \in L^\infty(I)$ である。あとは任意の $\varphi \in C_c^\infty(I)$ に対して

$$\int_I uv\varphi' dx = - \int_I (u'v + uv')\varphi dx \quad (8.7)$$

を示せばよい。

- $\varphi \in C_c^\infty(I)$ を任意に固定する。 $\text{supp } \varphi \subset \bar{J} \subset I$ なる有界開区間 J をとする (supp が I のコンパクト集合なのでこのような J をとれる)。このとき任意の $q \in (1, \infty)$ に対して $u, v \in W^{1,q}(J)$ である。

- 先に示したことから

$$\int_J uv\varphi' dx = - \int_J (u'v + uv')\varphi dx$$

である。 $I \setminus J$ で φ, φ' は 0 であるので (8.7) を得る。

- 部分積分の公式は定理 5.2 より従う。□

命題 8.5(合成関数の微分)

$G \in C^1(\mathbb{R})$ は $G(0) = 0$ を満たすとする。 $u \in W^{1,p}(I)$ とする。このとき $G \circ u \in W^{1,p}(I)$ であり

$$(G \circ u)' = G'(u)u'$$

が成り立つ。

証明

- $u \in W^{1,p}(I)$ とする。定理 8.1 より $u \in L^\infty(I)$ であるので $M = \|u\|_{L^\infty(I)}$ とおく。

- ある $C > 0$ があって

$$|G'(s)| \leq C \quad (s \in [-M-1, M+1]) \quad (8.8)$$

$$|G(s)| \leq C|s| \quad (s \in [-M-1, M+1]) \quad (8.9)$$

$$|G(s_1) - G(s_2)| \leq C|s_1 - s_2| \quad (s_1, s_2 \in [-M-1, M+1]) \quad (8.10)$$

が成り立つ。

- (8.9) より $G(u) \in L^p(I)$ が成り立つ。また, $G'(u) \in L^\infty(I)$ であるから $G'(u)u' \in L^p(I)$ である。
- 任意の $\varphi \in C_c^\infty(I)$ に対して

$$\int_I G(u)\varphi' dx = - \int_I G'(u)u'\varphi dx \quad (8.11)$$

を示せばよい。

$1 \leq p < \infty$ の場合

- 定理 7.1 より $\{u_n\} \subset C_c^\infty(\mathbb{R})$ があつて $\|u_n|_I - u\|_{W^{1,p}(I)} \rightarrow 0$ が成り立つ。
 $G(u_n) \in C_c^1(\mathbb{R})$ より, 滑らかな関数の部分積分の公式より

$$\int_I G(u_n)\varphi' dx = - \int_I G'(u_n)u'_n\varphi dx \quad (8.12)$$

- 定理 8.1 より $\|u_n - u\|_{L^\infty(I)} \rightarrow 0$ より, 十分大きな n に対して $\|u_n\|_{L^\infty(I)} \leq \|u\|_{L^\infty(I)} + 1$ が成り立ち, (8.10) より $\|G(u_n) - G(u)\|_{L^\infty(I)} \leq C\|u_n - u\|_{L^\infty(I)} \rightarrow 0$ であるから

$$\int_I G(u_n)\varphi' dx \rightarrow \int_I G(u)\varphi' dx \quad (8.13)$$

が成り立つ。

- 次に

$$G'(u_n)u'_n - G'(u)u' = G'(u_n)(u'_n - u') + (G'(u_n) - G'(u))u'$$

である。

- 第 1 項について

$$\left| \int_I G'(u_n)(u'_n - u')\varphi dx \right| \leq C\|u'_n - u'\|_{L^p(I)}\|\varphi\|_{L^{p'}(I)} \rightarrow 0$$

が成り立つ。したがつて任意に $\varepsilon > 0$ をとると, ある $n_0 \in \mathbb{N}$ があつて

$$n \geq n_0 \Rightarrow \left| \int_I G'(u_n)(u'_n - u')\varphi dx \right| < \varepsilon$$

が成り立つ。

- 次に G' は $[-M, M]$ で一様連続であるから, 上で定めた $\varepsilon > 0$ に対して, ある $\delta > 0$ があつて

$$s_1, s_2 \in [-M, M], |s_1 - s_2| < \delta \Rightarrow |G'(s_1) - G'(s_2)| < \varepsilon$$

が成り立つ. よって $n_1 \in \mathbb{N}$ があって

$$n \geq n_1 \Rightarrow \|u_n - u\|_{L^\infty(I)} < \delta$$

が成り立つ. よって

$$n \geq n_1 \Rightarrow |G'(u_n) - G'(u)| < \varepsilon \text{ a.e. } x \in I$$

が成り立つ.

- よって $n \geq n_1$ ならば

$$\left| \int_I \{G'(u_n) - G'(u)\} u' \varphi dx \right| \leq \varepsilon \|u'\|_{L^p(I)} \|\varphi\|_{L^{p'}(I)}$$

を得る. よって $n \geq \max\{n_0, n_1\}$ ならば

$$\left| \int_I G'(u_n) u'_n \varphi dx - \int_I G'(u) u' \varphi dx \right| < (1 + \|u'\|_{L^p(I)}) \|\varphi\|_{L^{p'}(I)} \varepsilon$$

を得る. これは

$$\int_I G'(u_n) u'_n \varphi dx \rightarrow \int_I G'(u) u' \varphi dx \quad (8.14)$$

を意味する.

- (8.12), (8.13), (8.14) より (8.11) を得る.

$p = \infty$ の場合 命題 8.4 と同様に示すことができる.

8.3 補足：定理 8.2(ii) の証明

補題 8.6 (補間不等式)

$1 \leq p \leq q \leq \infty$ とし, $f \in L^p(\Omega) \cap L^q(\Omega)$ ならば, $r \in [p, q]$ に対して $f \in L^r(\Omega)$ であり

$$\frac{1}{r} = \frac{\theta}{p} + \frac{1-\theta}{q}$$

とするととき

$$\|f\|_{L^r} \leq \|f\|_{L^p}^\theta \|f\|_{L^q}^{1-\theta}$$

が成り立つ.

証明

- $q < \infty$ の場合を示す.

- $\frac{1}{\frac{p}{\theta r}} + \frac{1}{\frac{q}{(1-\theta)r}} = 1$ であり

$$\int_{\Omega} |f|^{\theta r \frac{p}{\theta r}} = \int_{\Omega} |f|^p dx < \infty, \quad \int_{\Omega} |f|^{(1-\theta)r \frac{q}{(1-\theta)r}} = \int_{\Omega} |f|^q dx < \infty,$$

であるので Hölder の不等式より

$$\int_{\Omega} |f|^r dx = \int_{\Omega} |f|^{\theta r} |f|^{(1-\theta)r} dx \leq \left(\int_{\Omega} |f|^p dx \right)^{\frac{\theta r}{p}} \left(\int_{\Omega} |f|^q dx \right)^{\frac{(1-\theta)r}{q}}$$

つまり $\|f\|_{L^r} \leq \|f\|_{L^p}^{\theta} \|f\|_{L^q}^{1-\theta}$ を得る.

- $r < q = \infty$ の場合, $\theta r = p$ より

$$\int_{\Omega} |f|^r dx = \int_{\Omega} |f|^{\theta r} |f|^{(1-\theta)r} dx \leq \|f\|_{L^\infty}^{(1-\theta)r} \|f\|_{L^p}^{\theta r}$$

である. \square

定理 8.2(ii) の証明

- 定理 3.8 (Frechet-Kokmogorov の定理) を用いる.
- \mathcal{H} を $W^{1,1}(I)$ の有界集合とする. P を拡張作用素とし $\mathcal{F} = P(\mathcal{H}) \subset W^{1,1}(\mathbb{R})$ とおく. このとき

$$\mathcal{F}|_I = \{f|_I : f \in \mathcal{F}\} = \mathcal{H}$$

である.

- 拡張作用素 P は有界線形作用素であるから \mathcal{F} は $W^{1,1}(\mathbb{R})$ の有界集合である.
- 定理 8.1 より \mathcal{F} は $L^\infty(\mathbb{R})$ の有界集合である. そして補題 8.6 より任意の $q \in (1, \infty)$ に対して \mathcal{F} は $L^q(\mathbb{R})$ の有界集合である.
- 定理 3.8 の (ii) の条件をチェックしよう. $\varepsilon > 0$ を任意にとる.
- 定理 8.6 ($p = 1$ は (i) \Rightarrow (ii) でも ok) より, $C = \sup\{\|u\|_{W^{1,1}(\mathbb{R})} \mid u \in \mathcal{F}\}$ とすると

$$\|\tau_h u - u\|_{L^1(\mathbb{R})} \leq |h| \|u'\|_{L^1(\mathbb{R})} \leq C|h|$$

が成り立つ.

- よって $q > 1$ のとき $u \in \mathcal{F}$ に対して

$$\begin{aligned} |(\tau_h u)(x) - u(x)|^q &= |u(x+h) - u(x)|^{q-1} |u(x+h) - u(x)| \\ &\leq (2\|u\|_{L^\infty(\mathbb{R})})^{q-1} |\tau_h u(x) - u(x)| \\ &\leq (2C_1)^{q-1} |\tau_h u(x) - u(x)| \end{aligned}$$

である。ここで $C_1 = \sup\{\|u\|_{L^\infty(\mathbb{R})} \mid u \in \mathcal{F}\}$ である。よって $u \in \mathcal{F}$ に対して

$$\|\tau_h u - u\|_{L^q(\mathbb{R})}^q \leq (2\|u\|_{L^\infty(\mathbb{R})})^{q-1} \|\tau_h u - u\|_{L^1(\mathbb{R})} \leq (2C_1)^{q-1} C |h|^{\frac{1}{q}}$$

つまり $u \in \mathcal{F}$ に対して

$$\|\tau_h u - u\|_{L^q(\mathbb{R})}^q \leq (2\|u\|_{L^\infty(\mathbb{R})})^{q-1} \|\tau_h u - u\|_{L^1(\mathbb{R})} \leq (2C_1)^{\frac{q-1}{q}} C^{\frac{1}{q}} |h|^{\frac{1}{q}}$$

である。よって $\delta > 0$ を $(2C_1)^{\frac{q-1}{q}} C^{\frac{1}{q}} \delta^{\frac{1}{q}} < \varepsilon$ となるようにとればよい。□